

プロテスタント教会は万人祭司主義に立脚して歴史に登場した。しかし事実はこの主義は建て前論として後退して、現在にいたっている。無教会が現在のキリスト教世界でその独自性を主張する面があるとすれば、平信徒による万人祭司主義をかかげ、それを相当程度実践している点に求められよう。

しかしこの平信徒主義の主張も、たんに歴史の過去の形態を温存しようとする頑迷にもとづく主張であってはならない。無教会がこれを主張し、実践するのは、それが旧新約聖書一卷の主張するところにかなうと信ずるからにほかならない。

それでは現代における平信徒主義、とくに無教会の平信徒主義とは、なんなのか。なんであるべきなのか。その内容と思われるところを、五点にしぼって整理してみたい。

第一に、キリスト教は「イエスこそキリスト」（マルコ八の二九）という告白に立っている。この告白は新約聖書の基層にぞくすることばであり、購罪と復活の信仰にもとづく告白である。無教会も、新約聖書の最古層をなすこの告白を信仰の基礎としている。それにつづいて原始教会で成立した宣教（ケリユグマ）の告白や、さらにその後のキリスト教会で成立し、ひろく受けいれられてきた「使徒信条」（日本基督教団讃美歌第五六六番）を、無教会も尊重する。（これ以外の特定の聖書釈義が無教会の共通の神学となることはありえない。）この点で、無教会はキリスト教の正統信仰に立つものと考えられていい。

第二に、無教会は明確な救済史的歴史意識をもつ。神の創造の行為と救済の意志とを別のものとは受けとらない。終末は神の創造行為の完成の時であると考え。しかし神の創造行為の完結、つまり神の救済の完成は将来の一点のことにぞくし、その意味でいまの時は未完成の時ともいえる。げんに現実の歴史には「罪」も「暗闇」も存在する。しかし歴史は創造の完成の時をめざして進んでいる。いまは、黙示されたその完成の時の到来を待望する中間時である。

信徒はこの中間時を、「イエスこそキリスト」と告白しつつ、たがいに欠けたるを補い合い、協同の生を守るべきである。それは神の救済の出来事を、この世において、ことばと行為をもって証しする結果をとまなう。

第三に、無教会には辺境者意識ともよぶべきものがある。無教会信徒は神なきこの世を、神からあたえられた「隣人」としてとらえ、その罪を負い、その潔められることをねがう。既成の「聖」なる場に拠らず、この世にたいして開かれた態度をとる。そして既成教会の組織の及ばぬところへ福音の種子を持ち運ぼうとする。より具体的には、信徒は世俗の職業を重視し、しかも信仰にあってあらゆる権威、あるいは組織から自由である。みずからにあたえられた持ち場—職業、専門領域—において、それをとおして、神の名をあらわそうと努める。その持ち場こそ福音伝達のための最前線であるという自

覚に立つからである。日本の大部分の信徒にとって、各々の持ち場は異教のただ中にあるが、信徒はその持ち場を、救済史的視野に立ちつつ守りとおし、キリストを告白する。その場合、いわゆる職場伝道のかたち重点がおかれるのではなく、キリスト者としての生そのものが伝道であるとする。（結果として職場集会のかたちがあたえられれば、それを恵みとしてうける。）組織なく、世俗のただ中で「証人」として生きる生きかたは、聖と俗との接点、つまり辺境を生きる生きかたと考えられよう。

第四に、信徒は聖なる交わりを重視する。その交わりが集会のかたちをとることも、とらないこともある。またひとつ集会が核となり、その鳳辺に一といっても、かならずしも地域的な周辺をいうのではないが一ゆるやかなかたちの交わりが成立する場合もある。さらに既成の教会との交わりの可能性をもふくみ、その実例もある。いずれにせよ、信徒どうしが聖書を学ぶ共通の場をもつことは、自然のことであろう。

集会とは、第一に、神のことばが語られる場であり、第二に、神のことばの具体化を学ぶべき場である。

しかし教職者のいない無教会の場合、集会とはいっても、一般の教会の場合とはおもむきを異にする。教職者が不在である以上、ふつう儀式はおこなわれない。集会に連なる各々の信仰告白が中心となる。ただ、一般的には、その場に居あわすもののうち、聖書への接近においてより進んだもの（たち）が、その集会の指導者（リーダー）とされ、聖書講義をおこなう。あるいは初めから指導者としての召命をこうむり、集会形成を進める場合もある。いずれのかたちの指導者を中心とするにせよ、集会に連なるひとりひとりには、聖書の味読を心がけ、感話会その他の折に、ことばあるいは行為のかたちで、信仰告白をする機会にめぐまれる。結婚式、葬式など、信徒の実生活にかんする行事は、集会の指導者の責任で執り行なう。

集会は一般の教会組織とは異なり、人的な結束力は微弱である。無教会は集会を、神からの恵みとして受け、尊重し、それ以外の含みのある集会であることを拒否する。したがって、集会の解散も自由である。

第五に、平易なことばの使用ということ。無教会は平信徒の集まりであるから、教職者や専門学者の特殊用語を必要としない。一般の日本人にわかることば、平均的共通語を尊重する。福音のことばを、この国の風土に根づいたことばで語り合えないはずはない。これは相互理解を求める福音の精神にもとづく言語観である。各分野の専門家が用語の特殊性に酔うような現象が生まれれば、ことばは魔と化し、ひとのところに独善を生む。さらに、もし無教会内でのみ通用することばができあがったり、無教会の集会内での対話でさえ全く不可能となるような日が来たとしたならば、それは無教会終えんの兆候とみていい。

以上で、平信徒主義としての無教会の立場は要約できたと思われる。ところで、こ

のグループには、いまでも独立伝道者として活躍している人びとがいるので、平信徒主義との関連でその立場、役割を整理しておく必要がある。独立伝道者は、まえに述べた、言いかたにしたがえば、ひとつの（あるいは、ふたつ以上の）集会の指導者（リーダー）である。しかしふつうの集会の指導者が世俗の職業をもち、職業人として生き、同時に集会に拠っているのにたいして、独立伝道者は、すくなくともそうよばれる時点においては、世俗の職業にしぼられず、聖書研究と伝道に専心している。召命の体験にもとづいて独立したのであり、その生きかたは尊い。（世俗の職業を果たしおえて、余生を伝道にささげるタイプは、この範疇にいれない。）

無教会の指導者（リーダー）は一般的に世俗のなかで具体的な持ち場をもち、その具体的持ち場において、あるいはそれをとおして、信仰の告白をなす人びとのなかから出る。この型を在世間的な指導者とよぶことができよう。無教会が平信徒主義を基本とするかぎり、この型が常識的である。

したがって、独立伝道者の存在は一般的なものではなく、特別の選びの結果である。

独立伝道者はこの世との関係において、世俗のただ中で生きることを強いられる一般信徒にくらべて、より自由である。そのために、世俗の各職業分野にかんする認識においては、一般信徒に劣る傾向にあることは否みがたい。しかし他方において、福音の精神をより原理的に指し示し、またそれをより原理的に生きる立場にある。とくに福音伝播の実践面において、より積極的な可動性をあたえられている。だから独立伝道者は、各地に散在する小集会の育成にかかわり、またときにはそれらを連携する役割を担う。すぐれた独立伝道者が、前記在世間的指導者のおもだった人びととともに、聖書講義、講演、集会形成、著書・信仰誌の発行などの仕事を通じて無教会信徒の中心的存在となり、こんにちにいたっている。

ここで、独立伝道者たる資格を、パウロの場合を原型として考えておきたい。独立伝道者は、第一に「十字架のことば」にふれたものでなくてはならない（第一コリントの一八、他）。第三に、終生、謙虚に学ぶ姿勢をくずさぬ教養人でなくてはならない。パウロはきびしい教育をうけて育ち（行伝二二の三）、その後たんなるひとつふたつの専門領域をこえる広さの知識を身につけることで、精神の豊かさを培った人格であった。第三に、独立伝道者は経済的に独立していなければならない。さもなければ、神のことばを自由に、明確に語ることはむつかしい。パウロは、それゆえに、テント製造業者であることを誇りつづけた（行伝一八の三、二〇の三四、他）。伝道で生活を立てようとする「独立」伝道者があるとすれば、かれはすでに「職業」伝道者であるというべきである。以上三点は平信徒一般にかんしていわれるべきことがらであるが、影響力の大きい独立伝道者については、よりげんみつに受けとられなければならない条件であると思われる。

二〇世紀の最後の四半世紀は、それまで以上の速度で文明の世俗化が進行するであろう。そのことを考えると、世俗に密着して「地の塩」として生きる在世間的指導者の役割は、世俗にたいして一定の距離をもつ独立伝道者の役割にくらべて、より重くなる

かもしれない。

無教会は教会（エクレシア）の一部である。それは既成の教会が教会（エクレシア）の一部であるのと同じ関係にある。

だから無教会は、既成教会を同労者と考えて、教会組織の力の及ばぬところへ福音の種子を持ち運ぼうとする。それは教会の欠けたところを補うことにもなる。しかしそのためには、とくに異教的風土のなかでは、徹底した平信徒主義が必要となってくる。

キリストの御名のとなえられぬところで、「福音を伝えること」こそ、「異邦人の使徒」パウロの意図であった（ローマ一の一三、一五の二〇）。パウロがこの道を選んだのは、教会（エクレシア）への堅き接続を望んだからである。無教会が強いて既成教会との直接的連帯を求めず、無組織の平信徒主義を標榜するのは、信徒ひとりひとりが福音未踏のところへおもむくことで、真の教会（エクレシア）への全教的（エキュメニカル）な接続をねがうからにはかならない。

教会側にも「信徒運動」というものがある。それについて『キリスト教大事典』（教文館）は、次のごとくに記している。「万人祭司制の原理に立つプロテスタント教会でも、実際の教会活動においては、教職と信徒が明確に区別され、教職の活動にすべてが依存し、それが制度的に固定したため、信徒は常に受身となっている。教会は制度ではなく、生きた信徒の群であることを再認識しなければならない」（一九七九年版、五七五ページ）。これは既成教会の側でなされた反省の弁と解せられる。無教会はこのことばを、そのまま受けいれることができる。「教会は制度ではなく、生きた信徒の群」なることは、無教会の積年の主張であった。無教会はこれからも、平信徒主義に立って、ここでいわれる「生きた信徒の群」の一部でありつづけることをねがうものである。

『一九八五年 無教会夏期懇話会記録』（一九八六年六月）